

メジャーでは測りきれない”履き心地感”を測る。  
これも靴職人の大切な仕事



「靴のサイズというのはね、あるようでないもんですよ」と言いきるのは、創業80年、「靴コバヤシ」の主人、福島靖庸さんだ。ここは大阪でも数少ない手づくりの靴を売る店である。

「靴を履く時に一番大事なのは、履き心地。そやけど履き心地は測るわけにはいかんやろ」と笑う。確かに小さな靴をびったり履くのが好きな人や、反対にゆったり履くのが好きな人など、その好みは千差万別だ。

福島さんはお客の注文を受ける時、一応サイズを測るが、それだけを頼りに靴づくりをしない。まず、店にある靴をいろいろ履いてもらう。そして「これはきつい」「こっちはゆるゆるや」とお客の反応をみて、その人の”履き心地感”を判断するという。

「俺は絶対26cmやと思ってるお客さんでも、25.5cmのほうがびったりだったり、26.5cmが楽だったり。それだけでも1cmも差があるやろ?」。

まさにメジャーでは測りきれない”履き心地感”をもとに、木型を選ぶ。そして甲

高の足、横に肉付きがいい足など、その人の足の特徴に合わせて、木型に革を張って補正を施していく。

手づくりの靴には、底以外の靴のパーツを縫い合わせる甲師と、甲革と靴底をつけていく底付師という、2種類の専門の職人が必要だそう。福島さんは底付けを専門としているので、お客の注文が決まると、まず甲師に縫い合わせを発注する。

「たとえば、『9寸のトンビのオカメ、黒の牛革で丸』というようにな」。にこにこ笑いながら説明してくれるが、その意味はさっぱりわからない。

9寸はサイズ、トンビというのは、靴紐を結ぶ羽の部分が開くタイプ、オカメは靴先の切り替えのデザイン、丸は靴先の幅を表すそう。大丸、中丸、ブル、ドラゴンというように、靴先ひとつでも人の好みと幅によっていろいろ変わるねん」。



ワニと呼ばれる、釘抜きと金槌が一体化した道具。革を引っ張り、釘を打ち込み、また抜いて…を2~3度繰り返す。



木型と福島さん手づくりのものさし。ただし、ものさしで測った通りのサイズで靴づくりが始まるわけではない。

恰好よさと履き心地。  
ふたつを満足させる靴づくりには、  
100%とびつくとはいない——靴コバヤシ●福島靖庸さん

指先ひとつの動きでサイズもフィット感も変わる、  
繊細な”つりこみ”技術

発注に沿って縫い合わされた甲革があがつくと、腰玉(かかと部分の芯)を入れ、木型に本体をかぶせる。そしてつりこみという甲革を木型に合わせて引っ張っていく作業に入る。

つりこみは、福島さんが特に神経を使う重要な工程でもある。ワニと呼ばれる、釘抜きと金槌が一体化した小さな道具を手早く繰り返し、靴の先から革を少しずつ引っ張っては小さな釘を打ち込んでいくと、べらべらだった甲革が見る間に立

体的に靴の形を成して行く。ここで先玉(靴先部分の芯)を入れ、革のしわ取りにかかる。一度打ち込んだ釘を抜いて、しわをワニできゅっと引っ張り、また釘を打ち直す。丹念に2~3度繰り返すとぎゅっと寄っていたしわが取れ、つるんとした質感が生まれてくる。

「つりこみの時に革をようけ伸ばすと、きゅっと締まった恰好のいい靴になるんやけど、1サイズくらい小さくなってしまう。逆につりこみが甘いと足の当たりが柔ら

かくて履きやすいけど、見た目がそんなに恰好よくないねん」。

見た目の恰好よさを追求すると履き心地に影響する、逆に履き心地ばかりを求めると、形の美しさに満足がいかない。

「両方を満足させる理想の靴はなかなかつくられへんもんやなあ」と言いながらも福島さんの顔には子どものような笑みが浮かぶ。だからこそ靴づくりは面白いやと、その表情は物語っているかのようだ。

「客商売の中で一番お客さんの幸せそうな顔を見れるのは、喰いもん屋さんやねんで。なんでお祖父さん、靴屋のうて喰いもん屋さんしてくれへんかったんやろ(笑)」。一時も休まず手を動かしながら、笑顔で話す福島さんに、こちらも思わず心が和む。

